「つながりという価値：震災後にあらためて考える」

講 師／**阿部 健一**（あべ けんいち）
（総合地球環境学研究所研究推進戦略センター教授）

もともと熱帯林に関わる研究を行い、生物学的な関心だけでなく、そこに住む人々の生活、地域の経済や社会構造、さらには政治環境についても関心を深めてきた。現在は環境人類学、相関地域研究を専門とし、熱帯林に限らず、広く環境問題をめぐる国家の利益や人々の生活の変化、さらには価値観の転換などについても考えるようになっている。

今回のフォーラムのテーマは、東日本の大震災のことを考えると、まさに重要なテーマだとあらためて思います。皆さんもいろいろな思い、考えが胸の中に去来したと思いますが、私もいろいろなことを考えさせられました。

まず、既存の、われわれが拠って立っている生存基盤・社会システムがいかにもろいものであったか、まさに目の前に突き付けられたような気がしました。そして、こういった既存のシステムを支えてきたわれわれの価値観も、今見直す必要があるのではないか、と痛切に思いました。

この東日本大震災、私の場合、もちろん個人として、そして研究者として、さらに自分が所属している研究所として、一体何ができるのか、本当に考えさせられました。考えるだけ考えて、何ができるのか、本当に分かりませんでした。そうした中、関西学院大学の室崎益輝先生から「何か役に立とうなんて思う必要はありません。とにかく行って見てみなさい」と教えられました。「東北の人たちが、すぐあなたのことを信じて頼ってくれるわけではない。それよりも日本人として、一度あの現場を見ておいてください」とおっしゃられました。背中を押されたような気がしました。

そこで、6月に入って、岩手県の大槌町にまいりました。私は大槌町に多少縁がありました。ここにイトヨと呼ばれる、きれいな湧き水がないと育たない魚が生息しています。大槌町は日本有数のきれいな湧き水が出るところで、家の脇からきれいな水が湧き出ていて、水道などいらないのです。町の人にとっては何の変哲もない小魚ですが、われわれ外の人間にしてみると、「こんな魚が今も残っているんだ。自然にあふれたいいところだな」と思える町です。

そこで、町の人たちに、われわれ外の者の見方を紹介しようと「湧水の恵みを未来へ」というテーマでシンポジウムを行いました。われわれの水に対する研究成果、イトヨの生態についての研究成果を紹介しながら、この豊かな自然をどのように残していったらいいのか、皆さんで考えましょうというシンポジウムでした。このシンポジウムをもとに一冊の本を編み、2月に大槌町へお送りした直後に、3月11日の地震が起こり、シンポジウムであいさついただいた加藤町長もお亡くなりになられました。私個人としては、行くとしたら大槌町しかないと思い行ってまいりました。

今回の震災で分かったことは、防潮堤、防波堤でも必ず破堤するということ、言い換えれば、われわれが技術とか科学とかに頼っていたもの、それが果たして信頼に足るものかどうか、もう一度考えなければいけないということです。もう1つ大事なことは、自然災害は、また必ず繰り返されることだということです。実際三陸沖では地震があり津波があり、そういった歴史を繰り返していたわけです。

どれほど科学と技術が発展しようが、われわれは自然をコントロールできません。コントロールしようとするような思い上がりや傲慢さ、それをもう一度考え直すことが、今こそ必要ではないかと思います。「共生」という言葉も、私自身もどことなく暖かい、そしてユートピア的なイメージでこの言葉を使うこともありましたが、災害をもたらす自然と共存するとはどういうことか、自然の脅威を前に、現実的に考え直す必要があろうとも思っています。

技術が発展し、生活はどんどん安定してきていると思ったその生活基盤というのは、極めて脆弱だということが今回はっきりしました。物質的な豊かさと生活の利便性だけを追求してきた、そういった価値観を問い直さなければなりません。オルタナティブ、新たな価値観というものを今皆で考えなければなりません。

この講演のタイトルを「つながりという価値」としました。今回の震災で、復興支援にあたっていろいろな地域の人たちが関わって、それぞれのやりかたで支援を行っている、そういったつながりが大切だと思いました。人と人、地域と地域のつながりだけではありません。人と自然のつながりも再考しなければならなくなりました。つながりということ自体に今まで気がつかなかった素晴らしい価値があり、つながること、つまり関係することで、われわれは、ただ物質的な豊かさではなくて、もっと別の豊かさを手に入れられるのではないかと、そのようなことを思いました。

これまでのフォーラムでは、里山、あるいは生物多様性ということが議論されました。実は生物多様性というのも「つながり」なんです。多くの人がたくさんの種類の生物がいることが重要だと思っていますが正しくありません。その数多い生物がつながっていることこそが重要なのです。どの生物も、他の生物なしには生きられません。他の生物とつながっていなければなりません。さらに重要なのはそのつながりの中にわれわれ人間も入っているということです。だから生物多様性は大切なのです。

自然と人とも「正しく」つながると価値を生みます。人が介在すると大体自然は破壊されていくと考えがちですが、両方とも豊かになるつながりがある、それを実践したものが里山であるという言い方ができるかと思います。宮本常一さんの言葉にありますが、自然というものはそもそも寂しいものだと。しかし人の手が加わると暖かくなる。まさに里山というのは、そのような自然でないかと思います。里山の価値は人と自然がつながったところに生じた価値です。

ここから、東ティモールのコーヒーの話をしていきます。つながりが

価値を生むことの一つの例を紹介したいのです。

東ティモールは2002年にインドネシアから独立した、ティモール島の東側半分の小さな国です。もともとは森林に覆われていたのですが、長年焼畑や放牧を繰り返し、表土が流れ去ってしまって、農業をやるにはなかなか難しいところです。

独立直後、貧困ライン以下の人の割合は41%であったという数字が出ています。今のレートで言えば1日100円にも満たない生活をしている人が当時で41%あったということです。平均寿命は57歳。未就学者の割合は30%。その結果、識字率、文字の読み書きができる人が半分しかいない、そのような国です。

とはいえ、何も資源がないかと思ったら、いい資源が1つだけあるのです。極めて良質なアラビカ種のコーヒーが、この東ティモールで育ちます。国の収入の9割をコーヒーに依存し、国民の約4分の1がコーヒーしか作ってなく、コーヒーを売って得たお金で生活に必要なものを買う、そういった意味でコーヒーに全面的に生活を依存しているということになります。

極めて粗放的な栽培で、コーヒー栽培に欠かせない剪定も農薬も化学肥料もやらない。さらに昔ながらの庇陰樹（ひいんじゅ）栽培をとっています。まず木を植えて、その木が大きくなったときに、その下にコーヒーを植えるという栽培です。近代的なコーヒー栽培に比べると収量は低いですが、品質は潜在的にものすごく高いです。しかしコーヒーの品質は、豆そのものの品質だけでなく、収穫後のさまざまな処理の仕方によって大きく左右されます。そういった作業がなっていないので、国際市場では極めて安く買い叩かれるという事態になっています。

NPO活動の一環として、きちんと収穫後の処理をして、もっと買い上げ価格を高くしようという活動をしました。私自身はコーヒーの専門ではありませんので、つながりのあった専門家にお願いしました。すると、「品質を上げるのは2年でできる。でも、大事なのは量も確保することだ」。企業的には、ある一定の量がないと商品にはならないそうです。でも、われわれの目的は、コーヒー栽培農家の支援です。コーヒーの品質を上げ、買い上げ価格を例えば2倍にする、それは可能なわけです。そうなると、東ティモールのコーヒー栽培農家の人の年収が2倍になる。でしたらわれわれがやりましょうと。それで専門家に指導していただき、われわれが今販売しています。

国土にはほとんど森林が残っていませんが、コーヒー園があるところは人が植えた森林となっています。それが渡り鳥にとっては、もう格好の休息場所になるそうなのです。そうした森があると餌になる虫も多く、鳥にとって優しいということで、バードフレンドリーコーヒーという言い方をします。

一方収穫は、子どもも含め一家総出で行います。よく児童労働でないか、と言われますが、違います。家族みんなが、自分たちの生活のために、自分達のコーヒー園に出て収穫をするわけです。経営者に雇われて、安い賃金で働かされているのとは違います。家族で一緒に自分たちの生活のために働く。子どもが働かなければならない状況をそのまま肯定しているわけではありませんが、これはなかなか素晴らしいものです。朝から晩まで、子どもたちが疲れてきたら年長の人が歌を歌ったり冗談を言ったり、そういったことをしながら一日中収穫しています。ですから、これはある意味で「家族コーヒー」だという言い方ができるかもしれません。

今日、生産地と消費地はいろいろなところで遠くなっています。でも、うまくやればきちんとつながることができるのではないか。これを「地産地消」でなく「知産知消」と言っています。生産地と消費地、あるいは生産者と消費者がお互いのことをよく知る。そのことで実際は遠く離れている距離を短くできるのではないかと考えました。さきほど東ティモールで、どのようにコーヒーを栽培しているのか、やや詳しくお話ししたのはそのためです。

量を確保するということは商売上、大事なことです。品切れになると、お客さんからクレームがきます。でもちょっと違うことをわれわれは考える必要があります。消費者としての意識を変えることです。コーヒーが不作で品切れとなったとき、怒るよりも先に、「東ティモールの人たちは、生活の糧であるコーヒーが収穫できなかったら大変なのではないですか」と思いが及ぶような関係、これがより大事なのだと思います。

おそらくフェアトレードという考えも、こうした視点を含んで生まれてきたのではないかと思います。生産者と消費者がお互いによく知っているという関係。知ることによって両者の関係距離が短くなります。その延長線上には、消費者も生産者の一部だという、そういった考えすらあり得るのではないかと思います。きちんとした消費活動をすることで、素晴らしい商品を一緒に生産者と作る、そういった意味で、消費者はco-producer、共同生産者だという言い方、考え方もできるのではないかと思います。

お互いを知ることで、新たなつながり、関係ができ、このつながりこそがわれわれ、そして同時に、つながった相手先の人を豊かにできる。つながることによって「安定・安心・豊かになる」、あるいはつながりが断ち切れることによって「不安定・不安・貧しくなる」、そういったことに目を向けてはどうでしょうか。つながることの大切さに目を向けるために説明原理として「関係価値」という考え方を提示したいと思います。この関係価値というものは、ふだん気が付きにくい価値です。失って初めてその大切さに気が付く、そういった価値であろうと思います。

最後に大槌町の話をしたいと思います。大槌町で、実はあらたなつながりを見つけました。被災された方から話を聞くというボランティア活動があります。とにかくそこにいるだけでありがたいと思われるそうです。被災された方とボランティアの人が寄り集まれる場があちこちにつくられています。避難所にいた方、今なら仮設住宅にいる方が引きこもってしまわないように、設けられた空間です。被災された方が若いボランティアの学生に声をかけることの方が多いそうですが、「あ、そう。そんな遠いところからありがとう」と言いながら初対面の者同士の会話が始まる。それがすごく大事だそうです。つながりが拡がってゆきます。

そういった場所にお邪魔したときに、「コーヒーとお菓子があればね」と言われました。温かい飲み物と美味しいお菓子があれば会話も弾みます。ならばということで、われわれの東ティモールのコーヒーと、さらに滋賀県の杉の子作業所というところで知的障害者の方が作られたクッキー、これを2年間にわたって供給できるような体制を整えました。必要なお金は、ドイツのドレスデンの市民の方々が集めてくれた募金。ドレスデンの人たちは、10年ほど前に洪水の被害を受け、その時に世界中から支援を受けた恩返しをしたいと思われたそうです。経済的に貧しい東ティモール、社会的に弱者である知的障害者の方々、復興を果たしたドイツのドレスデンの市民。この三者が大槌町を基点としてつながっていく。「弱い」立場の人でも、つながれることで力になります。心が豊かになります。被災された方だけでなく、支援している東ティモールの人たちにとっても「自分たちにもできることがある」ことは自身と誇りにつながります。

今度の震災というのは、本当に未曾有の出来事でした。でもこれをきっかけにわれわれはいろいろなことを見つめ直す、考え直す、今こそ、われわれがこれからの生き方を考えなければいけない大きな契機になるのではないかと思います。その中でつながりの重要性というものは、一つの柱になるかもしれない、そのように考えています。大槌で、「財産も何もかも流されました。けどつながりだけは流されませんでしたよ」という言葉を聞きました。つながりは、関係価値は、使い尽くすことのない価値だと思いました。